

# 桃李の人々 vol.13

卒業生ロングインタビュー

子どもが生まれたらぜひ成蹊学園に入学させたい——成蹊学園に入学されたきっかけは何だったのですか。

**高島** 兄が小学校に入学する時、母がいくつかの小学校を見学して回り、成蹊学園の抜群の環境に魅かれたようです。「街中の学校なのに、緑に囲まれ、グラウンドでは小学生たちが泥んこになってはしゃいでいる。上品な家庭の子どもが通う学校のイメージがあったけど、子どもたちの様子を見てみると、とてもたくましい」と語っていました。実際、兄が楽しそうに通っている姿を見て、母は私もぜひ成蹊学園へという気持ちになったのでしよう。



フジテレビ アナウンサー

## 高島 彩

Aya Takashima

『めざましテレビ』『熱血!平成教育学院』など、報道からバラエティーまでこなすオールラウンドなアナウンサーとして大活躍中の高島彩さん。「アヤパン」の愛称で親しまれています。小学校から大学まで、成蹊学園一筋の高島さんに、当時の思い出を語っていただきました。

濃密な人間関係が築けることが小学校から大学までの一貫校ならではの魅力です。

——小学校時代の思い出を教えてください。

**高島** 担任の先生には本当に恵まれました。五歳の時に父を亡くした私は、一・二年生の担任だった伊東良延先生に父の姿を重ねて、いつも後ろをくっついて歩いていました。とくに思い出深いのが、夏の学校です。病気がかかり、医者からは「他の子どもに伝染したのですが、伊東先生は「せっかくなを別にしていたのだから。お風呂などを別にすればいい」と、連れていってくださいました。今なら大変な問題になる話かもしれませんが(笑)。生徒が傷つかないように、細やかな配慮をされる先生でした。

三年生から六年生までの担任だった石根要二先生のニックネームは「ネットシー」。先生もそれを気に入っていたようで、学級がよりにはいつもネットシーのイラストが添えられています。石根先生は生徒を楽しませることに長けた方で、コマ回し、メンコ、

ベーゴマなど、私たちが日ごろあまり触れたことのない、ちよつと昔の遊びをいろいろと教えてくださいました。時には授業をつぶして、メンコ大会などが開かれ、優勝者にはお菓子の賞品が出されたりもしました。

——やさしい先生が多かったのですね。

**高島** 単にやさしいというわけではありません。悪いことをした時は厳しく叱られました。しつけるべきところは、きちんとしつける。そんな教育方針が徹底していました。私はいきすぎた体罰には反対ですが、教師には、ある程度厳格さも必要だと考えています。野放しにしていたのでは、いつまでたっても子どもたちに社会性は身につきません。目にあまる行動があった時には、きちんと叱れる先生方だったからこそ、私はいじめも学級崩壊もいつさい経験することはありませんでした。報道に携わるようになった今、荒れた学校の実態を知らない経験不足を感じ、もつとハードな環境で揉まれ

た方がよかったかなと思うこともあり  
ますが、自分に子どもが生まれたら、  
やはり成蹊学園に入学させたい。厳格  
さとやさしさを併せ持つ先生方のもと  
で学ばせたいと思っています。

## 力仕事もこなした

### ラグビー部マネージャー時代

——部活動は何をされていたのですか。

**高島** 小学校では家庭科部に入りました。見学に行った時、アイスクリーム



### 高島 彩(たかしま・あや)

1979年東京都生まれ。成蹊小・中・高校を経て、成蹊大学法学部政治学科卒業。2001年にフジテレビにアナウンサーとして入社。1年目から、自らの愛称を冠した番組『アヤパン』で人気を博す。現在『めざましテレビ』『熱血!平成教育学院』『爆笑そっくりものまね紅白歌合戦スペシャル』『新春かくし芸大会』などで司会を務める。

を食べさせてもらい、それにつられて  
入部しました(笑)。ミシンを使った  
り、編み物をしたり、本格的な料理に  
挑戦したりと、小学生としてはかなり  
レベルの高い活動をしていました。そ  
のおかげで、今でも料理は得意です。

中学校からは、少し体を鍛えたいと  
考えて、バスケットボール部に所属し  
ました。当初、母からは「あなたによ  
うに飽きやすい性格だと、途中で嫌に  
なってやめてしまうのじゃない」と、  
反対されました。確かに、運動部で  
から、練習は厳しく、何度もやめよう  
かと考えたことがあります。けれど  
も、バスケットボールはチーム競技で  
す。私がやめると、他の皆に迷惑をか  
けてしまいます。結局、三年間続け  
て、試合にも出場しました。体力面以  
上に、途中で逃げない大切さという精  
神面を鍛えられた気がしています。

——高校でもバスケットボールは続け  
たのですか。

**高島** いえ、ラグビー部のマネー  
ジャーになりました。兄がラグビー部  
に所属しており、もともと興味を持っ  
ていたからです。練習の後に入るお風  
呂を掃除したり、泥だらけのジャージ  
を洗濯したり、テープングを買いにい  
走ったり、今になると、なぜあんな大  
変な力仕事を率先してやっていたの  
か、不思議な気がします。やはり、勝  
利した時の感動を分かちあえるところ

が魅力的だったのでしょう。大会前に  
なると、手作りのお守りを全員分縫っ  
ていました。ジャージのカラーと同じ  
模様で、背番号を縫い付けて、中に一  
言メッセージを入れて……。熱く青春  
していましたね(笑)。

## 入社試験で役立った ディベートの授業

——印象に残っている授業はありま  
すか。

**高島** 高校二・三年生で担任だった花  
山聡先生の国語の授業が印象的でし  
た。授業でディベートを取り入れられ  
ていたからです。森鷗外の『舞姫』を  
読んで、いくつかのテーマについて、  
賛成派と反対派に分かれて、議論した  
ことを覚えています。当時はまだディ  
ベートはほとんど知られておらず、画  
期的だったのではないのでしょうか。

実は、フジテレビの入社試験でも  
ディベートが課され、この授業の教え  
が役立ちました。花山先生から指導さ  
れたことは「ディベートのコツは、い  
きなり反論するのではなく、まず相手  
の意見を肯定すること。その上で『で  
も』と反論しなさい。そうすれば、相  
手の意見をよく聞いている印象を与え  
られるし、自分の意見を理解した上で  
反論されると、相手はさらなる反論を  
するのが難しい」というものでした。  
入社試験では、当時の記憶が一気に蘇  
り、自分なりにうまく対応することが

できました。とても感謝しており、あ  
のスタイルの授業をぜひ続けてほしい  
と思っています。

## 漢文朗読がアナウンサー としての芽生えに!?

——大学で、法学部政治学科を選ばれ  
た理由は何ですか。

**高島** 高校までに法学、政治学はそれ  
ほど深く学びません。未知の学問を学  
んでみたいという興味がありました。  
兄が法学部に進学していたことも影響  
したかもしれません。

——どんな授業が興味深かったですか。

**高島** いざ学び始めてみると、法学、  
政治学は予想していた以上に難しく、  
苦労しました。そんななか興味深く  
受講したのが、4年次の李静和先生の  
ゼミです。現実起こっている社会問  
題を素材として、日中・日韓関係など  
に関してディスカッションするゼミ  
で、それを通して、時事問題への関心  
を深めることができました。

専門科目以外で、最も力を入れて学  
んだのが中国語です。とくに中国の古  
典講読の授業は、発表の当番でない時  
でも、毎回必ず予習していました。も  
ともと、高校生の頃から漢文が大好き  
で、より深く学べるのが楽しかった  
のです。最近でも『論語』を読み返す  
など、漢文好きは続いています。



——漢文が好きだったのはなぜですか。

**高島** 漢文はとてもしずみカルで、音読しているうちに、そのままずっと頭にしみ入ってくる感覚が好きでした。今振り返ると、私にとって、漢文の音読がアナウンサーとしての芽生えだったのかもしれない。そういえば、中学生の時、授業で先生に朗読を「放送部でもないのに上手だ」とほめられます。さらにやる気が出たことを思い出します。

——アナウンサーをめざそうと考えられたのはいつごろからですか。

**高島** 正直なところ、就職活動のシーズンを迎える直前まで、まったく考えていませんでした。きっかけになったのは、兄の友人だった深澤里奈さんが、当時、フジテレビのアナウン



お台場にあるフジテレビ本社

サーをされており（現在はフリー）、

フジテレビ主催の「お台場アナウンススクール」の案内を持ってきて、「面白いから受けてみたい」と、勧誘されたことです。いわば一日体験コースのようなスクールで、原稿読みの基本を教わった上で、最後にはスタジオでシミュレーション番組の司会進行を務めるといふプログラムが組まれていました。その時、周りの人たちが、上手に原稿を読む姿に圧倒されました。対して、私は緊張で、まったくしゃべれない。早く家に帰りたいとばかり考えていました。すべてのプログラムが終了した後、当日の様子を撮影したビデオを渡されたのですが、恥ずかしくて、しばらくは見える気も起こりませんでした。数日後、意を決して見てみると、あまりのつたなさに悔しさがつつり、このままでは終われない。アナウンサーに挑戦しようという気持ちがつつと沸いてきたのです。そこで、アナウンス研修などに通い、本格的な訓練を積みました。

**自分のことも友人のことも  
いとおしく思える学園**

——アナウンサーになって、成蹊学園で過ごしたことが役にたっていると感じることはありますか。

**高島** フジテレビは、放任主義のテレビ局として知られています。指示めいたことが与えられることは少なく、自

分をどう生かすかは、自分で考えなさいといった雰囲気です。その企業風土は成蹊学園の校風にも通じるところがあります。何かを押しつけられるのではなく、自分で考えて方向性を見つけていく教育に馴染んでいた私は、放任主義の会社に入社しても、戸惑うことはありませんでした。

——今後、アナウンサーとして、どんな仕事に力を入れていきたいですか。

**高島** 『めざましテレビ』を担当して、もう五年目を迎えます。これまでは、この番組を継続させることだけに一生懸命でしたが、今後は自分の役割を再認識し、私らしさを持って、そして人の役に立てる仕事をしていきたい。番組をリードできるようにになりたい。そろそろそんなパワーが要求される立場になりつつあるとも考えています。

——最後に、後輩たちに向けて、メッセージをお願いします。

**高島** 成蹊学園の最大の魅力は、小学校から大学まで同じキャンパスの中にあるということ。十六年間通った私にとって、その生活を通して、濃密な友人関係が築けたことが大きな財産になっています。もちろん、ケンカもしましたが、常に一緒にいる環境ですから、いつの間にか仲直りしています。それが一貫校のメリットですね。



また、たとえ同級生でなくても、成蹊学園出身者だというだけで、親近感を覚えます。フジテレビの局内でも、卒業生同士は本当に仲がいい。初めて会った時でも「ああ、あの櫻並木を歩いたんだね」というだけで、何かうれしくなり、通いあうものがあります。しかも、卒業生同士で学園生活の思い出を語り合っている時に痛感するのは、悪口をいう卒業生がまったくいないことです。あの場所で学んでいた自分のおしく思える。それが成蹊学園の魅力だと思います。